

蒸溜によつて 28 %の塩酸とする。第 3 の方法は過剰の水を三重効用蒸発塔で蒸発させ 21 %の  $\text{CaCl}_2$  液とし、第 1 の方法と同様のプロセスで 15 %塩酸を回収する。この方法は酸洗槽や Interlake 法の設備を改造しないで

使用できるので最もすすめられる。第 1, 第 3 の方法は酸回収によつて Interlake 法でかかる費用が相殺されるが、第 2 の方法は新酸を購入する場合にくらべても利益がない。(斧田一郎)

## 書 評

### 「日本古代製鉄史」

(たたら研究会創立十周年記念論文集)

たたら研究会編

本書は昭和 45 年 9 月、“たたら研究会”が創立 10 周年を記念して発刊した、わが国古代製鉄についての研究の異色ある貴重な論文集。

たたら研究会はわが国の古代製鉄史に深い関心と愛着をよせて、その研究を続け互いに協力し合う、特異なグループで広島大学文学部内を母体として誕生した。

その研究結果は、年 1 回発行の機関誌“たたら研究”に、また毎年開催される大会で発表されてきた。史学、文学、経済、地質、そして冶金などの各部門にわたる会員諸氏は、それぞれ専門の立場から、さらにそこから進展して調査対象範囲を拡げて活躍しその成果は高く評価され、業績は史的諸研究のうちで立ち遅れの感があつた古代製鉄史の体系づくりに、中核的な役割を果たしてきた。ここに会は 10 周年を迎えた。

この記念論文集は会員諸氏の研究の総まとめというよりも、幅広く深く把握された研究の結実の一部発表といつたほうがよいかもしれない。本書の内容を見よう。

たたららの起原にふれ、ふいごのふるさとを尋ねる。古代製鉄技術の探求に考古学的、冶金学的な究明を行なう。その根源を求めて中国、朝鮮半島における製鉄法、製品に考察を加え、わが国への伝播の様相を推論する。弥生時代の鉄にめぐる諸問題を取りあげる。降つては古文書を探して、中世の千草鋼と日本刀の関係を求め、近世の鉄の流通、市場構造を調べ、新旧製鉄法交替期の広島官営鉄山の経営を語る。

ここに取りあげられたものは多岐多彩。製鉄史上の重要な問題の追求、提起が行なわれている。

本書は製鉄史研究家にとつて貴重な参考書であることはもちろん、古代製鉄に興味を持つ一般の人々にも、恰好な読物だ。昨日がすぐ遠い過去になつてしまいそうな進歩のはげしい現代の製鉄人は、前に目を向けているばかりではなく、ときには後の方もふり返つて古い昔に想いを馳せることも必要。

古代製鉄の解明には最新の理化学、冶金学的な知識と示唆によらなければならぬことが多い。あえて製鉄技術者研究者、各位に本書の閲読を奨めたい。(芹沢正雄)

(B 5 版, 355 ページ 定価 1500 円, たたら研究会)